

風景計画

－風景論から実践的自然風景地の計画・管理まで－

Landscape Planning - From Landscape Theory to Practical Planning and Management in Natural Landscape Area -

水内 佑輔 Yusuke MIZUUCHI

東京大学大学院農学生命科学研究科

1. はじめに

本稿は“風景計画”領域のレビューを企図したものであるが、造園学／ランドスケープにおいて“風景計画”という領域についての一定の含意はあるものの必ずしもその範囲は明確ではない。この傾向は造園学一般においてもみられるが、“風景計画”において特にそれは顕著である。「ランドスケープ研究」における定期的なレビュー企画としては本稿より先に2稿あり、それ以前の単発的なものを併せると3稿の先行するレビュー論文がある。特集企画全体における各領域の取捨選択にも左右されようが、これらにおいてもその取扱いの範囲は一定ではない。

1つの軸はより属地的かつ直接的な風景地の計画・管理に関する研究だけでなく、風景への価値観やモデル研究などを含んだ風景論研究を含めるかどうかという点である。レビュー論文のタイトルからそれは看取でき、1995年の堀繁¹⁾は「風景計画・自然公園計画」であり、2008年の古谷勝則²⁾は「風景計画、自然風景地の計画・管理」である。一方、2010年の山本清龍³⁾は「自然風景地の計画・管理」となっており、「風景計画」という言葉の有無が確認される。もう一方の軸は、対象とする風景・空間の範囲である。古谷(2008)は風景計画の範囲は、「都市・農村から自然公園まで」と言及しつつ、“自然風景地”のみを取り扱っている。山本(2010)は“自然風景地”⁴⁾の範囲に一定の基準があるわけではないという前提に立ち、都市を除いた原生自然から農村の自然までを取り上げている。堀(1995)はモデル研究が隆盛であった時期を担当したこともあってか、その範囲は都市までを射程としている。

こういった経緯をふまえ、本稿での取り扱いの対象は風景論研究を含みつつ、対象とする空間的範囲は原生自然から農村までをおおよその範囲とした。さらに山本(2010)を参考にしつつ、近代造園学の開始以来、風景計画領域で取り扱ってきた自然公園法に管轄される空間や、その延長線上にある世界遺産に関する事例は網羅的に収集した。一方で、他の法令で指定されている公園については、原則取

扱いの対象外とした。主要なレビュー対象はランドスケープ研究のほか、環境情報科学論文集、日本建築学会計画系論文集、都市計画論文集、日本森林学会誌としたが、特に境界領域における取捨選択については筆者の判断であるため、遺漏についてはあらかじめお詫び申し上げたい。

2. 風景モデル・風景の見方の探求

風景計画においては、保全も含めて風景を操作の対象とする。その際には、見られる対象の操作だけでなく、視点や視点場も含めて操作の対象となる。また、物理的な操作にとどまらず、情報の付与を含む風景の見方も併せての操作対象である。風景計画の方向性は基本的に良い風景の創出にあるが、目標である一方必ずしも普遍的な解のない良い風景を探るために、風景の見方を含む風景モデルやその形成の過程に関する研究が行われてきた。

(1) 風景モデルの把握と相対化、風景概念への議論

日本の古典図像モデル研究の流れとして阿部⁵⁾は近世の浮世絵師・歌川広重の風景の見方(風景観)とその現代への連続性を論じている。田代ら⁶⁾は「逆さ富士」に代表され、浮世絵としても描かれる水面に映りこむ倒景について計量的に解析している。また、白砂青松というモデルについて姜ら⁷⁾は日韓両国における白砂青松(白砂青松)の概念を探るべく用語の生成と展開を検討している。また、現代の大学生を対象に海岸に対する心象風景を探った松島ら⁸⁾による研究がある。この中で白砂青松という見方の断絶を再確認している。風景は文化の所産でもある。このことをよく示す「八景」について、耿ら⁹⁾は中国・北京の燕京八景の変遷及びその定着の過程における特徴の変化について論じている。この他、近代における風景の見方の変化について水谷¹⁰⁾は新しい技術である写真がもたらした影響を論じ、伊藤¹¹⁾は1950年代以降の風景に関連する「百選」を対象に風景の見方の重層・多様化を論じている。「風景」概念の整理はこの領域における根幹でもあるが、

吉村¹²⁾は「風景」概念の言説の整理を行い、「風景」化以前の無意識的風景体験の重要性について論じている。水内ら¹³⁾は、造園学の泰斗である田村剛の「風景」概念の整理とその国立公園への影響について論じている。横関らは農村や文化的景観とも深くかかわる郷土風景論について田村剛の郷土風景概念の変遷から¹⁴⁾、また明治末期の地方における動向から¹⁵⁾論じている。

(2) 各地域における風景の見方

近年、観光による地域活性化を含めた個性的な地域づくりが隆盛となっていることもあってか、その地域における風景の型や見方に関する研究が行われている。その点が明示されているものとして、押田^{16), 17)}による近世紀行文に描かれる鎌倉の風景とその現代的価値を観光の視点から論じたものがある。ある時点における風景への見方を探ろうとしたものとして、西村ら¹⁸⁾は近世絵図から筑波山の見方を、那須ら¹⁹⁾は近代の絵葉書から京都・嵐山における大堰川とその風景の見方について論じている。大竹ら²⁰⁾は絵画における三保の松原と富士山の描かれ方と意味の変遷を明らかにし、その価値の現代への連続と断絶を論じている。「地域らしさ」を捉えようとする研究として、塚田ら²¹⁾の群馬県中学校の校歌における山岳景の特徴を論じたものがある。四戸ら²²⁾は北海道旭川市における地域らしい風景とその生成過程を論じている。一方で、地域らしさのステレオタイプ化に対して懸念を表明したものもあり、上田ら²³⁾は、北海道らしい風景イメージを日中台の旅行者ごとに明らかにしたうえで、日本人の「北海道らしさ」の固定化を指摘した。

以上から見る研究の動向としては、デザインやプランニングにおける原則や規範の探求や、地域づくりのモチーフの探求が目的とされる一方で、規範モデルに対する批判的視点や相対化が狙われた研究もある点に特徴があるといえる。普遍化と同時に差異化が目指されるという現在の世界的潮流をふまえば、この動向は今後も継続されると思われる。

3. 風景評価、利用者の評価・意識

風景は、空間と人との間に生じる現象であるため、人の認識の仕方の把握は重要となる。特に、観光やレクリエーション利用を考えた場合には人々は何らかの期待を持ってその空間を訪問するわけである。質の高い空間のしつらえが求められるが、しばしば言及されてきたZubeら²⁴⁾の整理に従えば、空間の設計には専門家の判断だけでなく、客観性科学的知見に裏付けされた手法も求められ、そのため研究が行われている。ここでは風景の評価を対象としたもののみならず、自然風景地における空間体験に対する

評価を行ったものを取り上げた。

(1) 東アジアの風景観

艾海提江²⁵⁾らは、自然風景に対する日中(ウイグル)の共通・差異について、写真を刺激材料にしたSD法による主観評価、AHP法による比較評価などから明らかにしている。許ら²⁶⁾は中国東北部の瀑布の風景評価を近傍環境と併せてSD法を用いて明らかにしている。一方、SD法などは調査者が質問項目や尺度を設定するため、その因子の普遍化は1つの課題であり、徐ら²⁷⁾は環境心理学分野の国際誌のレビューにより海外のトレンドと日本との比較を行っている。

(2) 森の癒しへの期待

自然風景地としては量的に大きな地位を占める森林地域においては、癒し効果への期待など静的利用に関連した研究が行われている。上原²⁸⁾は長野県の森林セラピーロードにおいて風景を含む散策路の空間条件と癒し効果の関連を明らかにしている。張ら²⁹⁾は赤沢自然休養林における利用者行動の特徴を明らかにしている。特に高山らは森林の癒し効果に着目した一連の研究を展開しており、個人の特性による森林環境への印象の違いをオンサイト調査実験にて³⁰⁾、木漏れ日に対する印象評価と心理的ストレスとの関連³¹⁾を、注意回復理論に基づくPRS(Perceived Restorativeness Scale)を用いて、都市間環境との対比から森林環境の機能特性を³²⁾、森林鑑賞の心理的影響³³⁾を、心理的評価測定効率化を目指して日本語版活力感指標(SVS-J)の開発³⁴⁾を、さらに長時間の森林滞在による心身への影響³⁵⁾を明らかにしている。藤澤らは木漏れ日の生理的評価と印象評価³⁶⁾を、日本語版回復感指標(ROS-J)の開発とオフサイト森林浴の心理的回復効果³⁷⁾を明らかにし、上田ら³⁸⁾は森林ウォーキング中の心理的回復感の変化を明らかにしている。

また、オンサイトのみならず、人々が何を求めているかという期待感も含めた把握が必要である。高山ら³⁹⁾は、GTA(グラウンデッド・セオリー・アプローチ)を用いて快適な森林浴環境のイメージ構造を明らかにし、上田ら⁴⁰⁾は森林浴イメージの空間条件を明らかにしている。

このように個人や特定集団の利用や福祉の効果についての研究が飛躍的に蓄積されている。ヘルスツーリズムやメディカルツーリズムといった言葉の流行から見るように、森林を含む自然風景地の医療や癒し効果についての需要は高まるとみられ、持続的な利用を念頭とした実際の空間管理につながる研究が期待される。関連したものとして、田中による林学における観光レクリエーション研究のレビュー^{41), 42)}がある。

4. 物的景観の特性とその形成過程

対象地の自然や景観調査研究は風景計画分野において古典的なものと堀が述べるように、風景の見方と併せて物的景観とその形成の過程を把握することは極めて基本的かつ重要なものである。

七海ら⁴³⁾は伝統的漁法が生み出した栃木県的那珂川における築景観の特徴とその現代的価値について論じている。岡田⁴⁴⁾は日本各地の石灰・セメントの山地であり砦都と通称される37地域の景観の特徴と背景を論じている。下村ら⁴⁵⁾は写真を刺激材料として奈良県の斑鳩らしい景観の要素とその変化を明らかにしている。樋笠ら⁴⁶⁾は四国遍路の接待所の空間的形態とその存続要因を論じ、伊藤ら⁴⁷⁾はシークエンス景観として捉えられる熊野参詣道伊勢路の特徴を明らかにしている。

地域アイデンティティとも関連する歴史や文化の重要性や文化的景観概念の定着もあり、これらと関連する研究が行われている。すべての研究が人の生活のかかわりで生み出された風景を扱っており、風景観の変化を端的に示すものであるといえる。また、その特徴として物的景観のみならず、それらを支える背景やメカニズム、現代における意味が併せて探られ、新たな風景の価値を発見・再発見しようとする点がある。

5. 農村の風景

里地里山には「日本のふるさと」イメージが投影されて国民的風景との無意識的・了解があるよう、風景を扱う上では農村へのまなざしもまた重要であろう。本稿では都市近郊から中間山間地域を対象としたものを取り上げた。

物的景観とその見え方に着目したものとして、木村ら⁴⁸⁾、⁴⁹⁾は滋賀県の茶園景観の見え方について、村上是農業水利施設としての堰の景観について一連の研究^{50)~52)}を展開し、七海らは⁵³⁾伊豆半島松崎町における桜葉畑景観の生成プロセスを明らかにしている。海外の事例としては、樊ら⁵⁴⁾が風景の保全の観点から中国朝鮮族の木造民家の減少に対する森林政策の影響を明らかにしている。

地域住民の風景の見方や意識を扱ったものとして、小島ら⁵⁵⁾は神奈川県吉沢地区の里地里山に対する児童の風景認識を、岡山ら⁵⁶⁾は同地区の里山保全活動者の風景認識を明らかにしている。柴田ら⁵⁷⁾は大分県の中山間地域における耕作放棄地に対する住民の風景評価を、渡部ら⁵⁸⁾は地域アイデンティティとなる風景の生成過程を生活行為のとの関連から明らかにしている。このほか、浅田ら⁵⁹⁾は農村も主要資源である日本風景街道を対象にそのシークエンス景観の地域特性を解析し、福井ら⁶⁰⁾は圍繞景観の景観要素に関する調査手法について、石内ら⁶¹⁾は農村を

含む地域の風景資源が顕在化し得る地域区分方法を提案している。小野⁶²⁾は日常生活において体験される風景の価値を計画論へ組み込むための布石として、三陸海岸沿岸部の漁村からの海への見え方を分析している。

小浦ら⁶³⁾は重要文化的景観に指定されている四万十川流域における太陽光発電計画の顛末を取り上げ、景観保全のための計画課題と協議における論点を整理している。再生可能エネルギーと景観保全を対立的に捉えるのではなく適正に共存させるために、立地誘導型の計画、法的に位置づけられた協議の場、最終的に判断が委ねられる自治体への専門的支援の仕組みの必要性を論じている。

2007年の丹後天橋立大江山国定公園の指定においては、新たに里地里山の風景が資源とされた。ただし、赤坂⁶⁴⁾や横関らが論じたようにその価値についての認識は近代よりあった。このように風景計画領域において農村の風景は古くて新しい問題である。なかでも再生可能エネルギーとの撞着においては、各地域における風景・景観の社会的価値や公益性が問われる。小浦らが指摘するような課題克服のための計画論が要請されており、その起点にはやはり地域における風景の価値の発見・共有が欠かせない。

6. 国立公園・自然公園

風景計画領域と国立公園という制度に特別なつながりがあったとすることに異論は生じないと思われる。一方で、その関係性の再考が必要とされるとの見解もある。このため、本稿では1章を設け、国立公園と自然公園に関連するものを収集した。本章で取り扱ったものは合計84稿である。なかには公園区域内の資源を対象としたのみであり、直接自然公園とは関連しないものもあるが、本稿において量的に最も大きなものとなっている。研究内容や狙いに関しては他章で扱ったものとりたてて差異が無い点もあるが、この点については了解いただきたい。

(1) 通史・計画史

この間において量的に飛躍的蓄積が進んだのは国立公園史に関する研究である。この背景には文献資料のデジタルアーカイブ化の助けによる新たな資料の発掘もあるが、自然に対する価値観や社会情勢等の変化に対応するべく2007年の「国立・国定公園の指定及び管理運営に関する提言」を受けた制度の見直しからの流れがあるとみてよいだろう。国立公園の新規指定や分離独立が続く中で、2016年3月には「明日の日本を支える観光ビジョン」という国家ビジョンが策定され、環境省は「国立公園満喫プロジェクト」を立ち上げた。「従来の国立公園の枠組みにとどまらず、国立公園をつくり変えていくことが必要」と決意⁶⁵⁾されるなど国立公園は更なる転換の時期にある。こういっ

た際には制度の歴史や蓄積が改めて顧みられ、未来を占う材料とされると考えられる。

(i) 国立公園の計画史

国立公園の変化を示すものとして、渡辺ら⁶⁶⁾の自然公園法制定以降(1957)の資源対象が多様化する傾向と能動的な管理の重要性について論じたものがある。また、櫻井ら⁶⁷⁾は雑誌『国立公園』の表紙から自然風景に対する価値観の変化を論じた。この間、特に注目されたのが「国立公園の父」田村剛を中心とした国立公園法がされた1930年代周辺の動向であり、岡野、水内ら、水谷、西田らによる研究が進められた。この中で、国立公園の選定のメカニズム⁶⁸⁾、⁶⁹⁾、国立公園に関わる政治社会的背景⁷⁰⁾~⁷²⁾、田村らの計画思想⁷³⁾~⁷⁶⁾が明らかにされており、逸話・伝記の域を脱した感がある。また、佐山ら⁷⁷⁾は公園内の建築物の高さ規制が13mとして定着する経緯を明らかにしている。この他、村串⁷⁸⁾は戦後の国立公園の動向に関して自然保護の観点から論じている。

(ii) 地域から見た国立公園の位相

個別の国立公園を事例として取り上げ、計画思想や政治社会的動向を論じるものも多いが、各国立公園史の研究も進んでいる。佐山⁷⁹⁾は1974年の利尻礼文サロベツ国立公園指定(昇格)とその背景にある国立公園の方向性の変化を論じた。国立公園は突如として指定されるわけではなく、地元の積極的な働きかけなどがある。小野⁸⁰⁾は1934年の瀬戸内海国立公園の指定における地方の準備と区域決定との関連を論じ、さらに郷土アイデンティティの宣揚や地方振興の1つの手段として地域社会において受容されていた点を論じた⁸¹⁾。西川ら⁸²⁾は雲仙国立公園の前史や公園区域周辺を含む観光整備と都市計画との関係を論じている。町田ら⁸³⁾は阿蘇くじゅう国立公園の観光道路の成立に関わる地域の動向を明らかにした。地域の文脈という点からは、伊藤⁸⁴⁾の西海国立公園の九十九島における多島海景に関するものがある。地域の文脈とは異なる国立公園の風景として多島海景が導入されたものの、定着に至らなかった過程が論じられている。

国立公園として指定された場所の歴史や意味を追いかけた研究もあり、水内ら⁸⁵⁾は近世まで信仰と修行の場であった霧島の国立公園指定(1934)の経緯と霧島神宮の関係を論じている。黒田⁸⁶⁾は信仰と修行の場であった阿蘇山が近代において観光対象化される経緯について国立公園指定(1934)を含めて論じ、岡山ら⁸⁷⁾は国立公園指定における区域指定の経緯と中央行政側の草原景観への評価を論じている。初期の国立公園制度の動揺を誘引した場所として吉野熊野国立公園があるが、水谷は国立公園指定(1936)における私有林との撞着と調整の経緯⁸⁸⁾を、公園指定における地域の動向⁸⁹⁾を論じ、渡邊ら⁹⁰⁾は公園指定時において資源とされたものと背後にある価値観を、東口らは吉野

山の櫻の物的景観の変遷と風景の見方の変化を雑誌「旅」から論じている⁹¹⁾。また、水内ら⁹²⁾は1946年の伊勢志摩国立公園指定の要因を伊勢神宮の関係性から説明するなど、神社など歴史資源と国立公園の関係性に焦点が当てられている。

(iii) 自然保護・生態系保全の思想

昭和初期の事例が論じられる一方で、番匠ら⁹³⁾は日光国立公園戦場ヶ原における保全思想の変遷を論じている。中澤らは日本の自然保護の象徴でもある尾瀬国立公園における車道建設の経緯を明らかにしたうえで、国立公園の運営に関する合意形成について⁹⁴⁾を、廃棄物と排水対策の経緯⁹⁵⁾を論じている。

(iv) 国定公園・都道府県立自然公園

国定公園に関する研究も進んでいる。1950年代の国定公園の焦点が当てられており、小沢⁹⁶⁾は琵琶湖国定公園(1950)が国立公園でなく国定公園として指定された経緯を淀川河水統制事業と内湖干拓との関係性から論じ、山口⁹⁷⁾は公園前史としての明治・大正期の本多静六らによる「風景利用」計画と名勝仮指定が果たした役割について論じた。小沢⁹⁸⁾は中央行政内の国立公園道路の構想と耶馬日田英彦山国定公園成立(1950)の関連を、佐渡弥彦国定公園(1950)指定と地域の要望により大河津分水が区域に含まれた経緯⁹⁹⁾を論じ、さらに沖縄県の国定公園の前史として琉球政府立公園(1957)の特徴とその役割を解釈している¹⁰⁰⁾。山口は大和青垣国定公園の主要資源である「山辺の道」の成立の経緯¹⁰¹⁾、景観保全運動と思想の展開を¹⁰²⁾論じている。西邑ら¹⁰³⁾は近代以降の筑波山の観光ルートの変遷を論じている。この他、伊藤は国立公園行政における多島海景の規範・起点としての宮城県・松島の位置づけ¹⁰⁴⁾を、展望との関係から近代における松島の風景地の整備¹⁰⁵⁾を論じている。

1930年代前後の国立公園史に関しては西田による「風景の政治学」との唱導¹⁰⁶⁾の下にそのフレームが拡大された一方で、国立公園行政の開始や公園の選定などの個別の動向に関する精緻化が行われたといえる。これらの論点の1つは、“伝統的風景地”をめぐるものであり、この背景にはアメリカの国立公園を参考にしつつも、既に社会空間化されていた場所を国立公園指定した日本の事情がある。また、昭和初期のナショナリズムといった社会背景から、国立公園として指定された空間へのまなざしに着目がされた。

この傾向は個別の国立公園史についても同様であり、近年の歴史や文化への着目が国立公園にも及んでいると見ることが出来よう。また、地域社会から国立公園を捉える視点が多く示されており、国立・国定公園の意味や役割が相対化され、かつ多面的に捉えられている。国策的なインバウンド観光推進の中で「利用」のための空間整備が進めら

れる現下の国立公園を考える上で、その資源や利用の仕方の変遷の蓄積は重要な知見となる。

(2) 利用者の視点

自然風景地を棄損することなく利用者が満足するような質の高い体験を提供することは、計画・管理の目指す先の1つであり、そのための知見を集めるべく様々な方向からアプローチが行われている。

(i) 利用者の嗜好・行動の把握

この直接的なものに、五木田ら¹⁰⁷⁾による山岳系の国立公園での体験の意味や効能を日本的心性とする感動から明らかにしたものがある。満足感と関わる期待感の把握に関しては、山本¹⁰⁸⁾が富士山を対象に期待する資源性と利用のイメージについて論じている。体験の質や満足感は点的な自然風景だけでなく、総合的に判断されるものである。山本¹⁰⁹⁾は富士山の登山口別による満足感の違いを明らかにしている。また、施設整備に着目したものがあり、安ら¹¹⁰⁾は増加する中国人観光客を対象とした整備すべき施設の優先順位を、山本ら¹¹¹⁾は尾瀬国立公園のビジターセンターの利用者の意識や行動の特徴を整理している。満足感には混雑度の影響も考えられるが、2002年の自然公園法の改正では利用調整地区制度が創設され、自然公園の野趣性の維持が目指されている。田村ら¹¹²⁾は吉野熊野国立公園の西大台利用調整地区の利用者の意向を、山本¹¹³⁾は富士山の登山者数の上限設定に対する登山者の意向を明らかにしている。混雑感を把握するための調査研究として、一場ら¹¹⁴⁾らによる尾瀬国立公園におけるオンサイトと室内の比較調査がある。また、混雑回避行動に着目したものとして、山本による富士登山口の選択動向を明らかにしたもの¹¹⁵⁾がある。公園での人の行動による利用者の意識への影響に着目したものもあり、小林¹¹⁶⁾は北海道の国立公園において利用マナーに関する意識を明らかにしている。この他、自然風景地の管理のための新たな仕組みが導入される中で、山本ら¹¹⁷⁾は2014年度から実施されている富士山保全協力金制度への支払い行動に対する研究を行っている。また、国立公園計画において歩道は徒歩移動を念頭に計画されているが、国立公園で行われるアクティビティは多様化している。その代表であるトレイルランをめぐる現状について、服部ら¹¹⁸⁾は瀬戸内海国立公園六甲地域の事例を明らかにしている。

(ii) リスク管理のための知見

国立公園の計画・管理においては事故等のリスク管理の視点も重要である。一義的には、利用者の安全を確保することが重要であるが、どのレベルまで安全性を求めるのか、さらには、地域制を敷く日本の自然公園においては公園指定区域の管理の責任者も必ずしもは行政のみではないという実態もある。小林¹¹⁹⁾は日本の自然公園の実情にあった

リスク管理手法を構築するための考察をし、小林ら¹²⁰⁾は北アルプスの、山本¹²¹⁾は富士山における山岳事故の特徴を把握した上で利用者側が認識する不安や危険を明らかにしている。また、高山病に着目しつつ利用者の事故に対するリスク管理意識や登頂断念要因を明らかにしているもの¹²²⁾、¹²³⁾がある。さらに、山本¹²⁴⁾は2013年の富士山の世界文化遺産登録による利用者動向の変化をふまえ、利用者が認識する危険要素と併せて導入検討中であった富士山保全協力金制度への意識を明らかにしている。愛甲ら¹²⁵⁾は遭難事故が多発した大雪山国立公園のトムラウシ山において、アクセスの改善に伴う利用者動向を把握するべくルートを選択要因を明らかにしている。久保らは岩手山における単独登山者の特性と事故リスクに関する認識¹²⁶⁾や登山計画書に対する意識¹²⁷⁾を明らかにしている。小林は¹²⁸⁾長野県警察の山岳遭難記録を資料とし、2010年以降急増した山岳遭難事故の背景を探り、年齢層に応じたきめ細やかな指標や情報提供などの対策について論じている。

(iii) 情報

「情報」の重要性は増すばかりである。快適・安全な滞在のための適切な情報の付与は既往研究にて度々指摘されているが、目的地の選択にも大きな影響を及ぼすのは当然である。手掛けやすいこともあってか、特にプロモーション関係の動きが目立つ。国立公園においても、国立公園の魅力国内外に発信するため2016年4月にホームページのリニューアル¹²⁹⁾が行われたほか、facebook¹³⁰⁾やInstagram¹³¹⁾といったSNSによる情報発信が行われている。こういった「情報」を発信するためにも、利用者がどういった情報を求めているか、どういった情報が重視されているかなどの把握が必要である。小林¹³²⁾は知床国立公園における利用者が求める情報の特性や、車両規制などの環境情報に対する利用者認識を明らかにしている。

(3) 生態系の保全

2010年の自然公園法の改正において「生物の多様性の確保に寄与」が法目的に追記され、生態系維持回復事業が創設された。近年、シカによる生態系の破壊が問題となっているが、番匠ら¹³³⁾は日光国立公園の戦場ヶ原湿原におけるシカ対策の変遷を明らかにし、効果的なシカ対策をすべく、地形や道路など柵を設置できないシカ柵開放部への対策を論じている¹³⁴⁾。

(4) 地域の持続性に向けた管理の視点

日本の国立公園は地域制自然公園制度を採用しているため、地域における環境保全や運営管理などの活動が国立公園の土台を支えている。このため自然風景地の持続性のためには、それを支える地域の持続性が欠かせない。小椋ら¹³⁵⁾は大仙国立公園内に立地する大仙寺集落と秩父海多

摩国立公園内に立地する御岳山山上集落における土地利用管理と集落住民の意識を明らかにしている。寺崎ら¹³⁶⁾は国連世界観光機関の提唱するSTI (Sustainable Tourism Indicator) を奥日光地域へ試行的に導入し、地域の将来像の共有や合意形成におけるツールとしての有効性について論じている。外部からの力をいかに地域空間の管理へ資する形にするかは重要な視点であり、町田ら¹³⁷⁾は阿蘇の草原景観に対するボランティアの風景認識を明らかにしている。この先行研究として、草原景観の見え方に関する研究¹³⁸⁾がある。

管理の上では利用者動向やその傾向の把握は重要である。例えば、毎年発表される「自然公園等利用者数調」は唯一の長期的データではあるが信頼性への問題が指摘されている。愛甲ら¹³⁹⁾は利用者モニタリングの改善を大きな目的に、利用者動向調査の方法と実施主体である自然保護官の意識を明らかにしている。

エコツーリズムに関する研究も進められている。マストゥーリズムとは異なる深い体験のためにも地域の自然環境の理解が不可欠であり、インタープリターやガイドは重要な存在である。武らはエコツアーガイドの育成に着目し西海国立公園の南九十九島における将来的なエコツアーガイドの候補者であるエコツアーガイド補助者の地域環境に関する認識と経験による変化¹⁴⁰⁾、ガイドの希少生物との接触機会を定量的に明らかにしている¹⁴¹⁾ほか、自然観光資源の保護・保全の担い手としてのガイドの役割を明らかにした¹⁴²⁾。

(5) 調査手法

自然公園においてはトレイルを移動しながら自然風景の移り変わりが楽しめるためシークエンス景観として捉えることも重要であり、新たな手法によって風景の見え方や見方が把握されている。國井らはビデオ撮影した尾瀬国立公園のトレイル映像に対してフラクタル解析を行い、定量的な景観の変化¹⁴³⁾、¹⁴⁴⁾と主観評価との関係¹⁴⁵⁾を明らかにしたほか、多様性や蔓延度の指標を用いた解析¹⁴⁶⁾をしている。Mizuuchiら¹⁴⁷⁾は韓国の冠岳山において被験者にGNSSレシーバーを持たせて写真投影法を行い、GISを用いた解析を行っているほか、明治の森記念高尾国定公園において同様の手法にて、風景の見え方と利用者の評価を明らかにしている¹⁴⁸⁾。

(6) 自然風景地を支える仕組み

自然風景地を適切に管理していくためには法令等を根拠とする枠組みが必要な場合があり、その最たる例が自然公園制度である。国立公園法の制定は1931年であり85年を超える歴史を持つが、時代に適合した制度や仕組み、計画論が要請される。下村¹⁴⁹⁾の指摘にあるように各地域の特

性に応じた利用のあり方を検討する必要がある。愛甲ら¹⁵⁰⁾は支笏洞爺湖国立公園を事例にGISを用いて自然資源とレクリエーション資源を考慮したゾーニングを既存の地種区分と比較検討している。再生可能エネルギーとの調整は目下の課題であるが、加藤ら¹⁵¹⁾は風力発電に着目し、その立地における自然公園法の制度的課題を明らかにしている。増子ら¹⁵²⁾は和歌山県の県立自然公園の再編における土地利用規制力とゾーニングの変化を論じている。他の制度との連携という点では、西邑ら¹⁵³⁾は筑波山の眺望景観の保全に対する景観計画や都市マスタープランの実態を明らかにしている。西村ら¹⁵⁴⁾は景観法と自然公園法の連携に着目し、景観計画の規制誘導基準を自然公園の許可基準とする“上乘せ基準”に関する運用実態を明らかにしている。景観法は積極的な景観形成が趣旨である。自然公園法は規制法という性格であるが、ネガティブな要素を排除するだけでなく地域の実情に沿った景観形成をすべき地域・地区も多種存在するのが日本の自然公園であり、他の制度との積極的な連携も望まれる。

7. 世界遺産・保護地域とエコツーリズム

この間、2011年に小笠原諸島が自然遺産に、2013年には信仰の対象と芸術の源泉としての富士山の文化遺産登録などがあった。世界遺産や保護地域を棄損せずにその価値を体験出来るような計画・管理が必要とされる。小菅ら¹⁵⁵⁾は知床における来訪者と観光事業者の意識の違いについて明らかにし、山本¹⁵⁶⁾は富士山における来訪者特性と望ましい情報提供のあり方について論じている。吉田¹⁵⁷⁾は日本の世界自然遺産(屋久島、白神山地、知床、小笠原諸島)と文化遺産である富士山を対象に入域料への支払意志額とその規定要因について論じている。また、世界遺産としての価値に適合するものだけでなく周辺の地域資源を含める視点も地域の持続性という点からは重要であり、前田ら¹⁵⁸⁾は屋久島の里地への来訪者と集落の受容について明らかにし、磯部ら¹⁵⁹⁾はジオパークにおける地域資源の管理実態について運営方法の違いから整理している。海外の事例も報告されており、何ら¹⁶⁰⁾は空間管理の視点から中国における世界文化遺産の管理運営について論じ、山本ら¹⁶¹⁾は英国の自然歩道であるRights of WayとNational Trailそれぞれ管理実態を明らかにしている。自然環境保全の担い手である居住者に着目したのもあり、韓ら¹⁶²⁾は中国内モンゴル呼倫湖自然保護区における住民の意識を、増田ら¹⁶³⁾は先住民共同体の社会構造を明らかにしている。

エコツーリズムは自然環境保全と観光による地域の持続性を確保するための代表的手段である。川崎ら¹⁶⁴⁾はエコツーリズム推進法にもとづく法定協議会以外の活動組織を含め

てその実態について課題と共に整理し、武らはエコツーリズムにおけるガイドの役割と自然環境保全¹⁶⁵⁾へ果たす役割について論じ、杉村¹⁶⁶⁾は奄美大島における林業とツーリズムと環境保全を調和させる森林管理方法について考察している。海外の先進事例を報告するものとして、小菅らはオーストラリアにおけるエコツーリズム認証制度の特徴¹⁶⁷⁾とその実態¹⁶⁸⁾に関して、事業者の情報発信と利用者評価について¹⁶⁹⁾を明らかにしている。環境負担金に関する先進事例として武ら¹⁷⁰⁾によるパラオに関するものがあり、観光振興と一体として展開された自然保護政策について¹⁷¹⁾と併せて明らかにされている。

これら研究に通底するものは空間管理のためのステイクホルダーの意向や役割を明らかにするという点である。中でも2015年の地域自然資産法の制定により入域料の収受が可能となり、実際に富士山保全協力金制度も運用開始されている。入域料や環境負担金などについて海外を含む先進事例の分析など、効果的な使い方や用途の明確化をはじめ自然環境保全や持続的利用など実践的な自然風景地の管理のための研究が望まれる。

8. おわりに

情報化社会の進展による価値・嗜好の多様化と自然風景地の管理における地域社会の役割の重要性という見通しは8年前のレビュー時と変化していない。また、人の生活とのかかわりで生み出された風景への関心の比重はさらに上がっている。他方、東日本大震災の経験を経て、再生可能エネルギーの活用が推進される中で、立地誘導等の適切な共存方法が新たな課題となっている。

下村ら¹⁷²⁾や上田ら¹⁷³⁾のアートプロジェクトを取り入れた実践的取り組みが示すように、地域づくりにおいてはそのきっかけの創出や、目標像として地域らしい風景が探されることが往々にしてある。地域を読み解きその魅力を発揮していくという風景計画はその助けになり得る。自然公園法だけでなく、景観法や重要文化的景観をはじめ様々な制度が用意されている中で、それらを横断的につないでいくような実践的な計画論の精緻化が必要となろう。日常・生活の風景を掬いとり計画の俎上に載せるための技法は未だ不足している。また、世界遺産や保護地域においては、質の高い体験と空間管理の視点からの取り組みが望まれる。特に空間管理を考える上では、生態系マネジメントも含めた技術的、計画論的、政策論的視点を含む統合的アプローチが期待される。

国立公園は仕切り直しの時期に来ている。歴史研究の蓄積は将来を描く補助線としてその来し方を振り返る行為でもある。これら研究では国立公園の果たしてきた多面的な役割や可能性に言及されているが、インバウンド観光をは

じめとして、外部からの力を上手く取り入れ、地域の持続性を支える制度としての活用が期待される。このためには「情報」は見逃せない側面であり、海外からどのようなまなざしが投げかけられるのか、その価値・嗜好を探る研究は欠かせないと思われる。また、InstagramなどSNSの流行は審美性や珍奇性の高い風景への刹那的興味を強化している。一方、風景の背後にある歴史や文化への関心も強まっている。価値の多様・重層化がある中で、伊藤の成果⁸⁴⁾が示唆的であるが、国立公園のまなざしを相対化の上、場所の意味を整理し空間管理と結びつけるための仕掛けもまた必要になるとと思われる。

参考文献

- 堀繁 (1995) : 風景計画・自然公園計画 (特集・ランドスケープ研究の現在) : ラ研 58(3), 285-286
- 古谷勝則 (2008) : 風景計画, 自然風景地の計画・管理 (特集・ランドスケープ研究の動向) : ラ研 72(1), 43-47
- 山本清龍 (2010) : 自然風景地の計画・管理 (特集・ランドスケープ研究の潮流と展望) : ラ研 74(1), 16-20
- “自然風景地” という用語が指し示す範囲が異なるのであるが、その違いについて各論を参照されたい。
- 阿部美香 (2012) : 歌川広重による風景とその類義語の使用特徴 : ラ研オンライン 5, 43-46
- 田代泰史・大澤義明 (2010) : 水面に映り込む倒景に関する解析研究 : 都論 45(3), 601-606
- 姜享慧・笠原知子・齋藤潮 (2013) : 日韓両国における白松青松の用例とその展開 : ラ研 76(5), 565-570
- 松島肇・及川昌樹・上田裕文 (2012) : 大学生の海岸に対する心象風景の形象について : ラ研 75(5), 537-540
- 秋欣・高若飛・章俊華 (2010) : 中国・燕京八景の変遷及び特徴 : 環境情報科学論文集 24, 285-290
- 水谷知生 (2017) : 雑誌『太陽』による風景写真の流通が風景の見かたにもたらした影響 : ラ研 80(5), 405-408
- 伊藤いずみ (2014) : 現代における風景に関する百選の展開と選定地の変遷 : ラ研 77(5), 501-506
- 吉村晶子 (2010) : 風景の生成と身体化に関する類型論的研究 : ラ研オンライン 3, 51-60
- 水内佑輔・古谷勝則 (2015) : 国立公園の成立期における田村剛の示す「風景」概念と用法 : ラ研オンライン 8, 8-17
- 横関隆登・小野良平・下村彰男 (2017) : 田村剛にみる用語「郷土風景」における風景概念の変遷 : ラ研オンライン 10, 93-102
- 横関隆登 (2017) : 中原省三の郷土風景論にみる明治期における郷土風景論の動向 : ラ研オンライン 10, 162-167
- 押田佳子 (2012) : 徳川光圀『鎌倉日記』にみる近世鎌倉の観光および景観資源の発掘に関する研究 : ラ研 75(5), 373-376
- 押田佳子 (2014) : 近世鎌倉の風景描写と旅行者認識より捉えた切通しの観光的意義に関する研究 : 環論 28, 355-360
- 西邑雅未・黒田乃生 (2016) : 近世の絵画にみる筑波山の特徴 : ラ研 79(5), 585-588
- 那須将・樊磊・深町加津枝・下村彰男 (2016) : 20世紀前半の絵巻書にみる大堰川周辺域の景観構成 : ラ研 79(5), 715-720
- 大竹実実・山本清龍・下村彰男 (2017) : 絵画にみる三保松原と富士山との関係の変遷と現代の風景認識に関する研究 : ラ研 80(5), 569-574
- 塚田伸也・森田哲夫・橋本隆・湯沢昭 (2013) : 群馬県中学校の校歌を事例としたテキスト分析により導かれる山岳の景観言語の検討 : ラ研 76(5), 727-730
- 四戸秀和・上田裕文 (2013) : 個人意識としての気に入って

- いる風景と集団意識としての地域らしい風景の関係：ラ研 76(5), 575-578
- 23) 上田裕文・吉田恵介 (2012)：観光のまなざしによりつくられる北海道の風景イメージの研究：ラ研 75(5), 529-532
- 24) Zube, E.H., Sell, J.L., & Taylor, J.G. (1982) . Landscape perception: Research, application, and theory. Landscape Planning, 9, 1-33.
- 25) 艾海提江买买提・比屋根哲・都里昆啊合买买提 (2013)：中国と日本における大学生の自然・緑地景観に対するイメージ・評価の相違：一新疆農業大学と岩手大学における調査事例一：日林誌 95(6), 297-304
- 26) 許松善・古谷勝則 (2010)：中国東北の2大瀑布景観の評価と近傍環境の評価について：ラ研 73(5), 527-530
- 27) 徐中芄・下村彰男 (2013)：景観選好に関する評価因子の統合性：ラ研 76(5), 527-532
- 28) 上原三知 (2010)：森林セラピーロードにおける森林散策路の景観評価と心理面における森林浴効果との関連性：ラ研 73(5), 413-416
- 29) 張桐・佐々木邦博・上原三知 (2013)：自然休養林の散策コースにおける利用者の評価行動の分布に関する研究：ラ研オンライン 6, 6-11
- 30) 高山範理・筒井末春・朴範鎮・総谷珠美・荒牧まりさ・香川隆英 (2010)：利用者の個人特性がオンサイトの森林環境の印象評価に与える影響：ラ研 73(5), 531-536
- 31) 高山範理・藤澤翠・荒牧まりさ・森川岳 (2012)：木漏れ日の静止映像等による心理的ストレス低減効果に及ぼす印象評価・個人特性の影響：ラ研 75(5), 565-570
- 32) 高山範理・香川隆英 (2013)：注意回復理論を用いた回復環境としての森林環境の機能に関する研究：ラ研 76(5), 539-542
- 33) 高山範理・藤原章雄・齋藤暖生・堀内雅弘 (2014)：オンサイトにおける森林の視覚刺激の有無が主観的回復感・感情・注意回復力にもたらす影響：ラ研 77(5), 497-500
- 34) 高山範理 (2015)：日本語版活力感指標 (SVS-J) の開発と検証：環論 29, 33-36
- 35) 高山範理・齋藤馨・藤原章雄 (2016)：野外宿泊体験等を含む長時間の森林滞在が心身の回復に与える影響：環論 30, 55-60
- 36) 藤澤翠・高山範理・森川岳・香川隆英 (2012)：森林内の光環境が視覚的にもたらす生理的効果と主観評価に関する検討：環論 26, 103-106
- 37) 藤澤翠・高山範理 (2014)：日本語版回復感指標 (ROS-J) の開発とオフサイト森林浴の心理的回復効果の測定：環論 28, 361-366
- 38) 上田裕文・町田佳世子・河村奈美子・小関信行 (2013)：森林ウォーキングによってもたらされる気分変化のプロセスに関する研究：ラ研 76(5), 533-538
- 39) 高山範理・藤澤翠・荒牧まりさ・多田裕樹 (2011)：GTAを応用した快適な森林浴の環境整備に供する環境イメージの構造化：ラ研 73(5), 531-536
- 40) 上田裕文・高山範理 (2011)：森林浴イメージを構成する空間条件に関する研究：ラ研オンライン 4, 1-6
- 41) 田中伸彦 (2011)：1980年代から1990年代に着手されたわが国林学における観光レクリエーション研究：日林誌 93(3), 143-156
- 42) 田中伸彦 (2015)：1970年代から1990年代にかけての日本の観光レクリエーションに関わる林野施策の動向：林業経済 68(1), 19-35
- 43) 七海絵里香・石井佑也・大澤啓志 (2016)：那珂川における築景観の今日的意義と存続要因：ラ研 79(5), 559-564
- 44) 岡田昌彰 (2016)：砥都における景観の特長に関する研究：ラ研 79(5), 545-550
- 45) 下村泰彦・山崎寛朗・加我宏之・増田昇 (2011)：斑鳩らしい景観の継承性に与える景観構成要素の変化特性に関する研究：ラ研 74(5), 629-632
- 46) 樋笠奈穂美・黒田乃生 (2011)：四国遍路における接待所ならびに接待文化の現状と課題：ラ研オンライン 4, 57-61
- 47) 伊藤文彦・伊藤弘・武正憲 (2017)：熊野参詣道伊勢路における巡礼空間の装置性：ラ研 80(5), 589-592
- 48) 木村真也・村上修一 (2011)：中山間地域における茶園景観に関する研究：滋賀県東近江市奥永源寺地域について：都論 46(3), 151-156
- 49) 木村真也・村上修一 (2016)：中山間地域における沿道の茶園景観の特徴に関する研究：ラ研 75(5), 661-666
- 50) 村上修一 (2014)：河道および隣接地形との関係にもとづく斜め堰の取水点における景観の可能性：ラ研 77(5), 461-466
- 51) 村上修一 (2015)：旭川水系に現存する堰と川の地形との関係についての研究：ラ研オンライン 8, 18-21,
- 52) 村上修一 (2016)：斜め堰の取水点における堰体と河道および隣接地形の見え方に関する研究：ラ研 79(5), 569-574
- 53) 七海絵里香・大澤啓志・勝野武彦 (2013)：伊豆半島松崎町における桜葉畑景観の成立過程：ラ研 76(5), 443-446
- 54) 樊磊・今西純一・深町加津枝・柴田昌三 (2016)：景観保全の視点から見た中国朝鮮族木造民家及び付属構造物における木材資源の利用状況：ラ研オンライン 9, 130-138
- 55) 小島周作・服部勉・田中伸彦・町田怜子・麻生恵 (2017)：吉沢八景選定プロジェクトからみる都市近郊の里地里山地域における子ども達の景観認識：ラ研 80(5), 575-578
- 56) 岡山奈央・田中伸彦・本田量久・松本亮三 (2017)：里山環境が体験作業などを伴う来訪者に提供できる好ましい景観体験の解明：日林誌 99(5), 202-209
- 57) 柴田祐・佐藤彰人 (2016)：中山間地域における耕作放棄地の景観に対する地域住民の評価に関する研究：ラ研 79(5), 617-622
- 58) 渡部陽介・横張真 (2010)：行為と距離の観点からみた農村地域居住者が地域アイデンティティとして認識する景観の特性：ラ研 73(5), 643-646
- 59) 浅田拓海・石田真二・松田泰明・亀山修一 (2012)：北海道と関東における日本風景街道の道路シークエンス景観の地域特性に関する比較分析：ラ研オンライン 5, 33-42
- 60) 福井亘・山本聡 (2010)：圍繞景観における景観要素抽出の簡素化手法について：ラ研 73(5), 559-562
- 61) 石内鉄平・宮田明憲・桑原祐史 (2017)：茨城県における観光資源および眺望景観に着目した地域区分に関する研究：環論 31, 177-182
- 62) 小野良平 (2017)：三陸沿岸域における集落と海の視覚的つながり：ラ研 80(5), 585-588
- 63) 小浦久子・秋月裕子 (2017)：景観の公益に対する再生可能エネルギーの公益との調整にみる計画課題：都論 52(3), 1171-1176
- 64) 赤坂信 (2005)：1930年代の日本における「郷土風景」保存論：ラ研 69(1), 59-65
- 65) 環境省自然環境局国立公園課 (2016)：国立公園満喫プロジェクトの実施について：国立公園 746, 3-4
- 66) 渡辺綱男・佐々木真二郎・四戸秀和・下村彰男 (2012)：わが国における国立公園の資源性と其の取扱いの変遷に関する研究：ラ研 75(5), 483-488
- 67) 櫻井宏樹・下村彰男・小野良平・横関隆登 (2014)：雑誌『国立公園』表紙にみる添景人物と自然風景の描かれ方：ラ研 77(5), 507-510
- 68) 岡野隆宏 (2013)：わが国最初の国立公園選定の際の風景評価：ラ研オンライン 6, 18-24
- 69) 水内佑輔・古谷勝則 (2016)：1930年代の国立公園の選定の経緯と田村剛の評価の枠組み：ラ研オンライン 9, 103-114
- 70) 西田正憲 (2016)：1930年代における12国立公園誕生の国立公園委員会にみる風景の政治学：ラ研オンライン 9, 39-50
- 71) 水内佑輔・古谷勝則 (2016)：帝国議会と行政の関係をふまえた国立公園行政の開始に関する研究：ラ研オンライン 9, 63-71
- 72) 水内佑輔・古谷勝則 (2017)：国立公園法成立をめぐる政治過程とその背景：建計 82(733), 635-645

- 73) 水内佑輔・古谷勝則 (2014) : 大正期における田村剛の示す国立公園の風景とその変遷 : ラ研 77(5), 413-418
- 74) 水谷知生 (2014) : 大正期の 16 国立公園調査地の選定経過と田村剛の国立公園観 : ラ研オンライン 7, 67-74
- 75) 水谷知生 (2015) : 私有地を含む国立公園への田村剛の考えと 1931 年国立公園法の実際 : ラ研オンライン 9, 24-32
- 76) 水内佑輔・粟野隆・古谷勝則 (2016) : 金剛山国立公園計画からみる田村剛と上原敬二の計画思想に関する研究 : ラ研 79(5), 431-436
- 77) 佐山浩・土本俊和 (2011) : 国立公園内の建築物の高さ規制の変遷と都道府県景観条例にみる建築物高 13 m 規制の状況 : ラ研オンライン 4, 33-39
- 78) 村串仁三郎 (2011) : 戦後日本の国立公園制度研究の総括 : 経済志林 79(1), 441-473 など。原則的に査読論文を取り扱っているため、この他村串の論稿については適宜参照されたい。
- 79) 佐山浩 (2010) : 利尻礼文サロベツ国立公園指定の経緯と釧路湿原国立公園指定との関連性 : ラ研 73(5), 391-394
- 80) 小野芳朗 (2010) : 瀬戸内海国立公園・下津井と牛窓の風景準備 : ラ研 73(5), 381-384
- 81) 小野芳朗・伊藤乃理子 (2011) : 瀬戸内海・白石島と高島の国立公園と名勝指定における郷土宣揚策の構造 : ラ研 74(5), 425-430
- 82) 西川亮・中島直人・窪田亜矢・西村幸夫 (2016) : 昭和前期の雲仙における国際公園都市計画に関する研究 : 都論 51(3), 1160-1167
- 83) 町田怜子・保田真紀・水内佑輔・田中伸彦 (2016) : 観光実業家・油屋熊八の人物史からみる阿蘇くじゅう国立公園観光道路の成立過程 : ラ研 79(5), 489-494
- 84) 伊藤弘 (2012) : 佐世保における九十九島と内陸の結びつきの変遷 : 建計 77(682), 2763-2769
- 85) 水内佑輔・古谷勝則 (2013) : 霧島神宮境内地の国立公園指定に至る経緯 : ラ研 76(5), 433-438
- 86) 黒田乃生 (2012) : 阿蘇山の国立公園指定の経緯と観光登山の変遷 : ラ研オンライン 5, 55-62
- 87) 岡山俊直・岡野隆宏 (2016) : 阿蘇くじゅう国立公園指定時における区域指定の経緯と草原景観の評価 : ラ研オンライン 9, 74-82
- 88) 水谷知生 (2014) : 吉野熊野国立公園指定時の私有林との調整結果とその意味 : ラ研オンライン 7, 81-88
- 89) 水谷知生 (2014) : 吉野熊野国立公園熊野地域の選定における地元の要望と風景認識 : ラ研オンライン 7, 89-97
- 90) 渡邊真菜美・伊藤弘 (2017) : 吉野熊野国立公園の指定過程において評価された吉野の風景と社会的、文化的背景 : ラ研 80(5), 499-502
- 91) 東口涼・今西純一・飯田義彦・森本幸裕 (2013) : 奈良県吉野山の土地利用の変遷と旅行雑誌から見た景観受容の変化 : ラ研 76(5), 601-604
- 92) 水内佑輔・古谷勝則 (2012) : 国立公園指定における伊勢志摩国立公園の特異性の背景と伊勢神宮の関係 : ラ研 75(5), 389-394
- 93) 番匠克二・手嶋潤一・堀繁 (2011) : 日光国立公園戦場ヶ原湿原における保全意識の変遷に関する研究 : ラ研 74(5), 557-560
- 94) 中澤圭一・土屋俊幸 (2017) : 尾瀬車道建設問題を踏まえた国立公園管理運営における合意形成過程の一考察 : ラ研オンライン 10, 69-79
- 95) 中澤圭一・土屋俊幸 (2017) : 尾瀬地域における廃棄物及び排水対策の検討過程 : ラ研オンライン 10, 103-114
- 96) 小沢晴司 (2012) : 琵琶湖国定公園の成立と内湖干拓との関係性に関する考察 : ラ研オンライン 5, 5-16
- 97) 山口敬太 (2016) : 大正期の琵琶湖南部における「風景利用」計画と名勝仮指定による景勝地の保護と利用 : ラ研オンライン 10, 5-13
- 98) 小沢晴司 (2012) : 耶馬日田英彦山国定公園の成立と国立道路公園構想について : ラ研 75(5), 395-398
- 99) 小沢晴司 (2012) : 佐渡弥彦国定公園成立と大河津分水包含に関する考察 : ラ研オンライン 5, 111-117
- 100) 小沢晴司 (2013) : 自然公園成立史の観点からみた琉球政府立公園の特徴 : ラ研 76(5), 439-442
- 101) 山口敬太 (2013) : 近代における奈良・山辺の道の形成とその背景 : ラ研オンライン 6, 25-32
- 102) 山口敬太・繁田いづみ・川崎雅史 (2014) : 奈良・山辺の道における景観保全の展開とその保全思想 : ラ研オンライン 7, 1-8,
- 103) 西邑雅未・黒田乃生 (2015) : 筑波山における観光ルートの変遷 : ラ研 78(5), 587-592
- 104) 伊藤弘 (2010) : 大正から戦後にかけての国立公園行政における多島海景観としての松島の評価 : 建計 75(656), 2391-2396
- 105) 伊藤弘 (2011) : 近代の松島における風景地の整備と眺めの関係 : ラ研 74(5), 769-772
- 106) 西田正憲 (2012) : 自然の風景論—自然をめぐるまなざしと表象 : 清水弘文堂書房, 392pp
- 107) 五木田玲子・愛甲哲也 (2015) : 山岳系国立公園利用者の感動、満足、ロイヤルティ、心理的効用の関係性 : ラ研 78(5), 533-538
- 108) 山本清龍 (2009) : 富士登山者が期待する公園資源と利用のイメージ : ラ研 72(5), 571-574
- 109) 山本清龍 (2011) : 富士登山者の満足度の登山口別比較 : ラ研 74(5), 543-536
- 110) 安可・吉田謙太郎・山本充 (2017) : ベスト・ワースト・スケーリングによる国立公園施設整備事業への中国人観光客の重要度評価 : 環論 31, 195-200
- 111) 山本清龍・北島恭子 (2014) : 尾瀬国立公園におけるピジターセンターの利用特性と活用に向けた提案 : 環論 28, 325-330
- 112) 田村省二・浦出俊和・上甫木昭春 (2016) : 吉野熊野国立公園の西大台利用調整地区における利用動向及び利用者意識に関する研究 : ラ研 79(5), 525-530
- 113) 山本清龍 (2016) : 富士山の登山者数の上限設定に対する登山者の意向 : 環論 30, 73-78
- 114) 一場博幸・田村裕希・栗原雅博・古谷勝則 (2010) : 尾瀬ヶ原の利用状況の写真を現場と非現場で提示した時の混雑感評価の差異 : ラ研 73(5), 523-526
- 115) 山本清龍 (2010) : 富士登山者の登山口選択と混雑回避 : 環論 24, 321-326
- 116) 小林昭裕 (2012) : 国立公園の環境に配慮した利用マナーに対する利用者の態度 : ラ研 75(5), 489-492
- 117) 山本清龍・ジョーンズ トマス エドワード (2013) : 富士山保全協力金の支払行動を規定する因子に関する研究 : 環論 ceis31, 189-194
- 118) 服部優樹・浦出俊和・上甫木昭春 (2017) : 国立公園六甲地域におけるトレイルランの利用の現状と課題 : 環論 31, 183-188
- 119) 小林昭裕 (2011) : 管理上の視点からみた自然公園のレクリエーション利用におけるリスク管理に関する考察 : ラ研 74(5), 537-542
- 120) 小林昭裕・ジョーンズ トマス (2015) : 北アルプスにおける遭難実態と登山リスクに対する登山者の意識 : 環論 29, 241-246
- 121) 山本清龍 (2010) : 富士山における登山者属性と認識された不安および危険に関する研究 : ラ研 73(5), 485-488
- 122) 山本清龍・荒牧重雄 (2012) : 富士山における登頂断念からみた山岳遭難事故に対するリスク管理と高山病 : 環論 26, 319-324
- 123) 山本清龍 (2013) : 富士登山者の登頂断念と高山病症状 : 環論 27, 169-174
- 124) 山本清龍 (2015) : 富士登山者が認識する危険因子と安全登山の推進に対する期待 : ラ研 78(5), 523-526
- 125) 愛甲哲也・川口恵典 (2013) : 大雪山国立公園トムラウシ山における登山者のルート選択要因 : ラ研 76(5), 703-706
- 126) 久保暁子・山本清龍 (2016) : 岩手山の登山者を事例とする単独登山志向と事故リスク削減に対する意識の関係に関する研究 : 環論 30, 279-284

- 127) 久保暁子・山本清龍 (2017) : 岩手山登山者を事例とする登山計画書の提出に関わる意識に関する研究 : 環論 31, 171-176
- 128) 小林昭裕 (2016) : 長野県警察の山岳遭難記録に基づく、山岳遭難事故急増の背景と軽減方策に関する研究 : 環論 30, 79-84
- 129) 環境省 HP < <http://www.env.go.jp/press/102468.html> > 2018.2.13 閲覧
- 130) National Parks of Japan の Facebook ページ <<https://www.facebook.com/NationalParksOfJapan>> 2018.2.13 閲覧
- 131) National Parks of Japan の Instagram <https://www.instagram.com/nationalpark_japan>2018.2.13 閲覧
- 132) 小林昭裕 (2010) : 知床国立公園における情報に対する利用者の認知や要望および、これらに関する要因 : ラ研 73(5), 493-498
- 133) 番匠克二・雨宮俊 (2010) : 日光国立公園戦場ヶ原湿原におけるシカ対策の変遷に関する研究 : ラ研 73(5), 509-512
- 134) 番匠克二 (2010) : 日光国立公園戦場ヶ原湿原シカ侵入防止柵の開放部における侵入防止対策の効果検証 : 環論 24, 87-92
- 135) 小椋弘佳・樋口秀 (2016) : 国立公園内に位置する大山寺集落と御岳山山上集落の土地利用管理に関する研究 : 建計 81(722), 921-931
- 136) 寺崎竜雄・五木田玲子・門脇菜海 (2017) : 持続可能性指標を活用した観光地管理に関する実践的研究 ―奥日光をケースとして― : ラ研オンライン 10, 155-161
- 137) 町田怜子・下嶋聖・粕川玉青・麻生恵 (2013) : 阿蘇地域におけるボランティアの草原再生に対する景観認識に関する研究 : ラ研 77(5), 655-658
- 138) 町田怜子・下嶋聖・三浦南・麻生恵 (2013) : ラ研 71(5), 693-696
- 139) 愛甲哲也・五木田玲子 (2016) : 国立公園における利用者モニタリング調査の実態および課題と自然保護官の意識 : ラ研オンライン 9, 1-6
- 140) 武正憲・斎藤馨 (2010) : 南九十九島エコツアーにおけるガイド補助者の業務と環境認識に関する研究 : ラ研 73(5), 489-492
- 141) 武正憲・濱泰一・斎藤馨 (2014) : 南九十九島エコツアーにおけるガイド従事者による希少生物種の観察機会 : ラ研 77(5), 477-480
- 142) 武正憲・斎藤馨 (2012) : 九十九島エコツーリズムの展開における自然観光資源とガイド従事者の関係 : ラ研 75(5), 493-496
- 143) 國井洋一・古谷勝則 (2010) : フラクタル解析を用いた尾瀬国立公園におけるシークエンス景観の定量分析 : ラ研 73(5), 585-588
- 144) 國井洋一 (2016) : 尾瀬国立公園のシークエンス景観に対する複数の定量指標による比較分析 : ラ研 79(5), 579-584
- 145) 國井洋一・古谷勝則 (2011) : 尾瀬国立公園のシークエンス景観に対する定量指標と主観評価の関連性について : ラ研 74(5), 633-636
- 146) 國井洋一 (2014) : シークエンス景観画像のフラクタル解析による尾瀬ヶ原の経年比較 : ラ研 77(5), 511-514
- 147) Mizuuchi, Y., Son, Y., Kang, M., Furuya, K. (2015) : Constructing a Survey Method for Landscape Evaluation Using Visitor Employed Photography and GPS : Landscape Research Japan Online 8, 1-7
- 148) 水内佑輔・野嶋太智・古谷勝則 (2016) : 明治の森高尾国立公園を事例とした自然公園における森林トレイル利用者の風景評価 : ラ研オンライン 9, 91-102
- 149) 下村彰男 (2014) : 国立公園が果たした役割と今後 : ラ研 78(3), 204-207
- 150) 愛甲哲也・富所康子 (2012) : 自然資源とレクリエーション資源を考慮した自然公園のゾーニング手法の検討 : ラ研オンライン 5, 96-103
- 151) 加藤賢史・松川寿也・佐藤雄哉・中出文平・樋口秀 (2015) : 風力発電施設の立地に対する自然公園法の制度的課題に関する研究 : 都論 50(3), 961-967
- 152) 増子翔太・松川寿也・中出文平・樋口秀 (2016) : 都道府県立自然公園の再編による土地利用規制変化とその調整実態に関する研究 : 都論 51(3), 285-291
- 153) 西邑雅未・黒田乃生 (2017) : 筑波山の眺望景観に関する制度の現状と課題 : ラ研 80(5), 559-562
- 154) 西村拓也・松川寿也・中出文平・樋口秀 (2016) : 景観法と連携した自然公園法の許可制度の運用実態に関する研究 : 都論 51(3), 292-298
- 155) 小菅貴史・古谷勝則 (2014) : 知床観光経験者と観光事業者の考える知床観光への期待と満足に関する研究 : ラ研オンライン 7, 9-16
- 156) 山本清龍 (2015) : 世界遺産富士山の来訪者管理のための情報提供のあり方に関する検討 : 環論 29, 189-194
- 157) 吉田謙太郎 (2015) : 日本の世界自然遺産及び富士山への入域料に関する支払意志額と規定要因 : 環論 29, 201-206
- 158) 前田茜・後藤春彦・佐藤宏亮 (2010) : 屋久島の里地における地域資源への来訪者の流入と集落の対応に関する研究 : 都論 45(3), 817-822
- 159) 礪部有喜・秋田典子 (2014) : ジオパークの運営方式が地域資源の管理に及ぼす影響に関する検討 : ラ研 77(5), 533-536
- 160) 何銀春・黒田乃生 (2013) : 中国における世界文化遺産の管理運営に関する研究 : ラ研 76(5), 597-600
- 161) 山本裕実子・深町加津枝・柴田昌三 (2017) : 英国 Cotswold 地域における Rights of Way と National Trail の管理・運営 : ラ研オンライン 10, 26-30
- 162) 韓国栄・古谷勝則 (2015) : 中国内モンゴル呼倫湖自然保護区における共同保護協定と生態移民による自然保護の現状 : ラ研 78(5), 555-560
- 163) 増田知久・土肥真人 (2015) : 自然管理を実践する先住民共同体の社会構造 : メキシコ, オアハカ州, イクストラン・デ・アラレス共同体の住民と土地との関係に着目して : 都論 50(3), 517-522
- 164) 川崎興太・三部和哉 (2015) : エコツーリズムとエコツーリズム地域推進組織の実態と問題点 : エコツーリズム地域推進組織に対するアンケート調査とヒアリング調査の結果を踏まえて : 都論 50(1), 61-68
- 165) 武正憲・斎藤馨 (2011) : 文献によるエコツーリズムにおけるガイドの役割と環境保全との関係把握 : ラ研 74(5), 531-536
- 166) 杉村乾 (2016) : 奄美大島における林業、ツーリズム及び希少種保全の共存のための森林管理方針について : 環論 30, 145-150
- 167) 小菅貴史・古谷勝則・親泊素子 (2011) : オーストラリアにおけるエコツーリズム認証制度 (NEAP) の仕組みと特徴について : ラ研 74(5), 597-602
- 168) 小菅貴史・古谷勝則 (2012) : オーストラリアエコツーリズム認証商品の取得年別分布と宿泊施設の立地環境について : ラ研 75(5), 513-518
- 169) 小菅貴史・古谷勝則 (2014) : オーストラリアエコツーリズム事業者の Web による情報発信とアンケートによる利用者評価 : ラ研オンライン 7, 161-168
- 170) 武正憲・飯田晶子 (2016) : 自然観光地における観光者の環境負担金に対する支払意思と貢献実感の関係 : ラ研 79(5), 495-500
- 171) 飯田晶子・武正憲 (2015) : パラオ共和国における観光振興と調和した自然保護政策の展開に関する研究 : ラ研 78(5), 783-786
- 172) 下村泰史・佐藤久恵 (2012) : 風景づくりと流域市民のコミュニケーション天若湖アートプロジェクト : ラ研 75(5), 655-660
- 173) 上田裕文・高橋友香 (2015) : アートプロジェクトによる風景認識の変化とまちづくりへの参加意欲に関する事例研究 : ラ研 78(5), 703-706